1−2　沿　　革

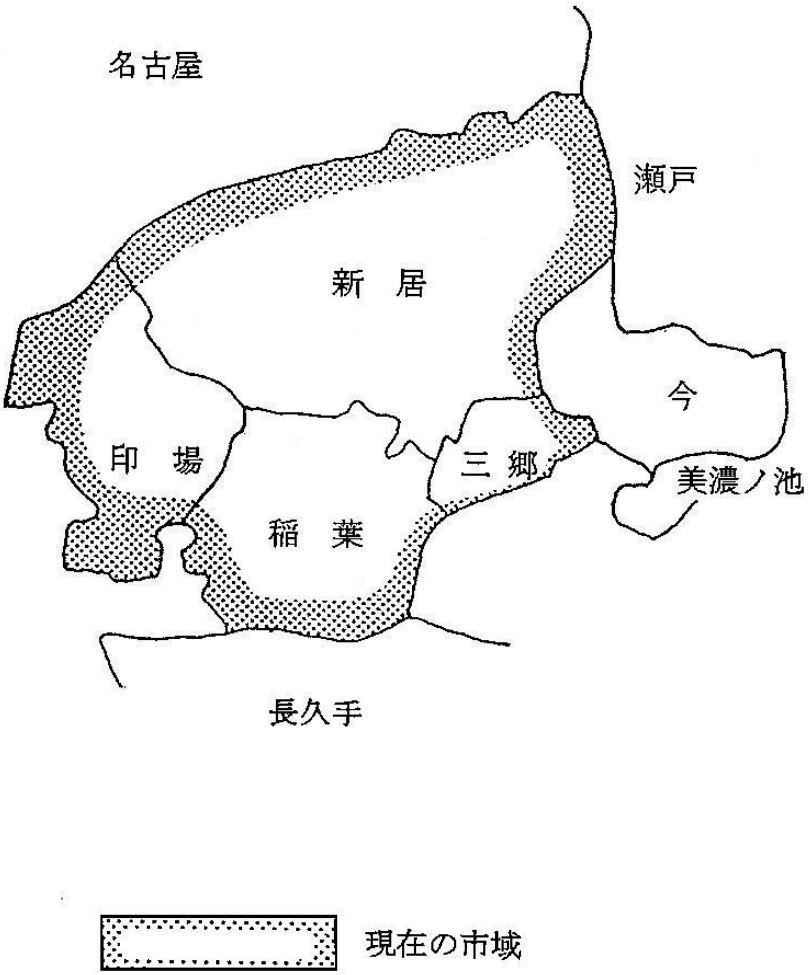
尾張旭市の歴史は古く、弥生時代にここが居住地となっていたことは、各地で発見された遺跡から確認できます。市内には、豪族の居住を示す古墳がいくつか存在し、古代の農村計画として知られる条里制の遺構もみられ、また、官社の一つである式内社（渋川神社）も設立されています。

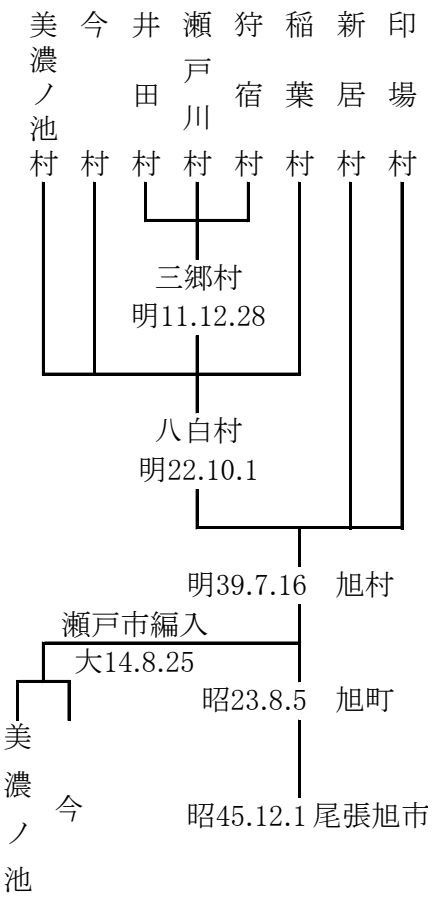
中世には、現市域は、尾張国八郡のうち山田郡に属し、各所に豪族が住みつき“小牧・長久手の戦い”の舞台となっています。

近世に入ると、開田が進みましたが、いわゆる「五反百姓」が多かった。この時期、本市域における６集落の原形が形成され、また、今日に残る芸能の多くが固定化していきました。

尾張旭市域は、明治になって一時名古屋県に属しましたが、明治５年に愛知県の所管するところとなり、明治１３年春日井郡は東西に分かれ、当市域は、東春日井郡に属しました。これより先、明治１１年に近世の村である狩宿村、瀬戸川村及び井田村の３村が合併し三郷村の成立となり、明治２２年には、三郷村、稲葉村、今村及び美濃ノ池村が合併し、八白村となりました。さらに、明治３９年には、八白村、印場村及び新居村が合併し、旭村となりました。このように、明治時代に合併を重ねて行政区域を拡大しましたが、大正１４年には、前述した今村及び美濃ノ池村が分離して瀬戸町（現在の瀬戸市）に編入され、区域が減少しました。その後、大正、昭和期を通じて変化がなく、昭和２３年に町制を施行し、さらに、昭和４５年には市制を施行して現在の尾張旭市となりました。（詳細は次項のとおり。）

尾張旭市の生いたち





現在の市域